



カンキツ新品種「瑞季」の現地試験状況



イチジク株枯病抵抗性台木の技術移転

果樹研究部では、研究成果発表会(<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/30/r4happyoend.html>)でも紹介した『カンキツ新品種「瑞季」(みずき)』や『イチジク株枯病抵抗性台木新品種』の生産現場への定着化に向けて取組むとともに、レモンを生産振興するための技術開発、デジタル技術を活用した付加価値向上につながる技術開発及びそれらに関する技術支援を行っております。本号では、成果情報で「瑞季」に続いて品種登録された「汐里(しおり)」を、研究紹介で年内に収穫完了できる早期肥大レモン系統の選抜を、トピックでは現地実証試験を開始したイチジク株枯病抵抗性台木「励広台 2 号(れいこうだいにこう)」を紹介します。これらからも生産者の皆さまが思い描く 5 年後、10 年後の姿を強く意識しながら、儲かる果樹生産の実現に向けて取組んでいきたいと思っております。

(果樹研究部長 福島 啓吾)

**成果情報**

**広島県育成カンキツ品種「<sup>しおり</sup>汐里」**

果樹研究部

種子親を四倍体ヒュウガナツ、花粉親を「Siamese Acidless」(無酸ブンタン)としてブンタンタイプの新品種「汐里(しおり)」を育成し、令和 4 年 6 月に品種登録となりました。

「汐里」は、三倍体なので完全種子が極めて少なく、果肉はヒュウガナツ譲りのゼリー状で、果汁が多い果実です。赤道部で二つにカットし、スプーンですくって食べるのに適しており、手を汚さずに美味しく味わえます(図1)。果実重は 300g 前後、果形は球形、果皮は黄色く滑らかで、3 月中旬が成熟期です。貯蔵中に、果皮障害やす上がりりがほとんど発生しないため、カンキツ類の流通量が少なくなる 5、6 月まで出荷が見込めます。着果は良好で(図2)、カンキツかいよう病の発生はアマナツより少ないです。現在は、「汐里」の普及に向けて、高品質果実栽培技術や長期貯蔵技術の開発に取り組んでいます。



図1 「汐里」の果実



図2 「汐里」の着果状況

## 成果情報

### アスパラガスの養分吸収特性に基づく施肥管理

生産環境研究部

近年、本県で導入が進んでいるアスパラガス施設栽培では、従来の固形型肥料に比べて養分吸収効率の良い灌水同時施肥栽培の導入も進んでいます(図)。

当センターにおいて、施設環境下で栽培されたアスパラガスについて、生育時期別に生育量および茎葉や鱗芽、根等の養分含有量を調査し、生育時期別の養分吸収割合を明らかにしました。アスパラガスの窒素吸収は夏芽収穫期の初め～中盤(6月中旬～9月上旬)にかけて増大することが特徴です(図)。本結果を基に灌水同時施肥栽培における窒素施用量の基準を定めました(表)。

この施肥基準に基づく灌水同時施肥栽培と当センターで開発した環境制御技術を組み合わせることで、収量 4t/10a を達成することができました。



立茎期	夏芽収穫期			養分転流期
	前期	中期	後期	
13%	22%	23%	20%	22%

図 アスパラガスの灌水同時施肥栽培の様子と生育時期別窒素吸収割合

表 アスパラガスの灌水同時施肥栽培における窒素施用量の基準

生育時期	目安	窒素施用量 (g/株)
春芽収穫期	3月下旬～4月下旬	2
立茎期	5月上旬～6月上旬	6
夏芽収穫期	6月中旬～10月中旬	31
養分転流期	10月下旬～12月中旬	7
合計		46

## 成果情報

### 足場管ハウスと高畝を利用したアスパラガス環境制御技術の現地実証

栽培技術研究部

三次市甲奴町のアスパラガス環境制御の現地実証(当センターニュース No.134 参照)において、令和4年から収穫が始まっています(図1)。

高軒で換気効率が良い「足場管ハウス」および光環境を制御する「自動調光システム」により、慣行のアーチパイプハウスに比べ 35℃以上の高温を回避し、30～35℃の遭遇時間も約 40%削減できました(令和4年8月上旬)。この結果、アスパラガスの開き・曲がりなどの品質が良くなる効果が得られました。また、「桢板式高畝栽培」および「土壌養水分制御システム」により、生育に必要な根域の確保と土壌水分の適正化が可能となりました。令和5年には、夏芽(7月下旬以降)の収量が 64～85kg/10a/旬増加し、合計収量は慣行区の1.3倍となる 2.8t/10a が得られました(図2)。



図1 環境制御区(左)と慣行区(右)の萌芽状況

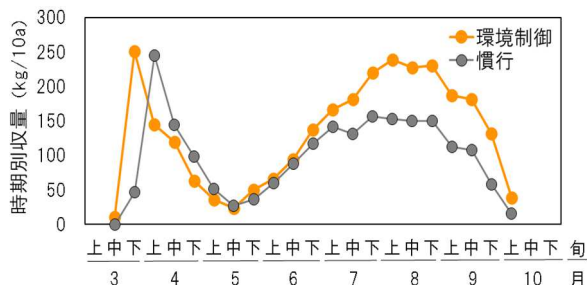


図2 環境制御技術の現地実証におけるアスパラガスの時期別収量



## 研究紹介

### 年内に収穫完了できる早期肥大レモン系統の選抜

果樹研究部

広島県は、日本一のレモン県として生産量 1 万トンを目標に振興を図っています。県内レモン産地は温暖な島しょ部に集中していますが、目標達成に向けて本州沿岸部での生産拡大を目指しています。

一般的なレモンの品種では、収穫が 12 月以降となり、冬季の気温が低い沿岸部では寒波被害が発生します(図 1)。このため、沿岸部におけるレモン生産拡大は足踏み状態が続いていました。

着果した状態で寒波にあうことが被害拡大の原因と考えられます。そこで、寒波が押し寄せる 12 月下旬までに収穫完了できる早期肥大レモン系統を選抜しました(図 2)。現在、この系統を対象に、沿岸部におけるレモン生産が可能かどうかを検証する研究に着手しています。



図1 寒波被害を受けたレモン



図2 9月に収穫した早期肥大系統レモン

## トピック

### イチジク現地実証試験はじめました

果樹研究部

今回は、広島県(以下、本県)と農研機構とで共同育成したイチジク株枯病抵抗性台木の第二弾として、「励広台 2 号(れいこうだいにごう)」について紹介します。

この品種は「励広台 1 号」と同等のイチジク株枯病抵抗性があります。加えて、本県の主力品種「蓬萊柿(ほうらいし)」の栽培が省力的に行なえる樹形を維持できる特長があり、生産者の負担軽減が期待されます。本品種は当面の間、本県のみで利用可能であり、当部では積極的に県内産地への定着を図っています。その取組みの一つとして、令和 4 年度から JA 広島果実連、地域の JA や農業技術指導所と連携し、県内 3 ヶ所で現地実証試験を開始しています(図 1 及び 2)。

生産者からは、「定植 2 年目の初収穫が楽しみ」との期待する声が寄せられています。



図1 定植した試験苗(尾道市6月)



図2 順調に生育する試験苗(尾道市11月)

# 虫博士の虫のお話



## (9)チャコウラナメクジ その2

東広島市の住宅地で、メタアルデヒドを使った誘引トラップによるチャコウラナメクジの個体数を6月から10月まで調査しました。6月中は1日で10頭採れる日もありましたが、だんだん採れる数が減っていききました(図)。8月下旬からはナメクジにほとんどお目にかかれないうになりました。その地点の個体数を推定すると、総個体数は約140頭でした。住宅地に100頭を超えるチャコウラナメクジがいるとは想像していませんでした。

県内では、レタスやコマツナなどの軟弱野菜でナメクジ類の被害が報告されています。農地でのナメクジの個体数と被害程度の関係は明らかになっていません。このため、まずは今回実施したような誘引トラップで農地のナメクジ個体数を把握する予定です。

さらに、現地の生産者圃場でナメクジの発生推移と個体数を明らかにして、効果的な防除技術開発につなげられたらと考えています。

(図・文 生産環境研究部 総括研究員 星野 滋)

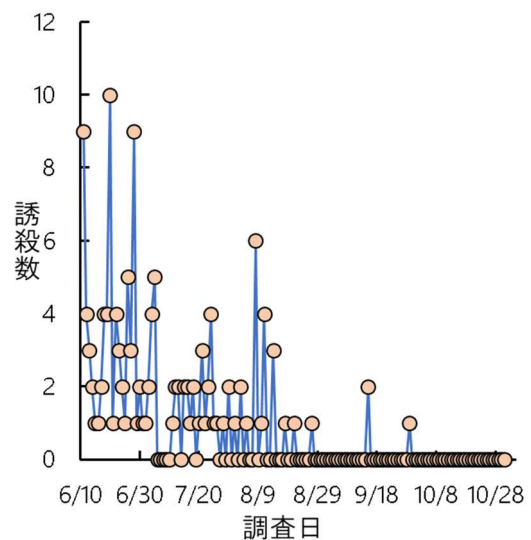


図 誘引されたチャコウラナメクジの推移  
(調査地点:東広島市西条町寺家)

### 農業技術センターホームページをご覧ください

#### ①キーワードで検索

広島県 農業技術センター

#### ②アドレスから移動

<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/30/>

#### ③QRコードを読み込み



農業技術センターホームページでは、センターニュースのバックナンバーをはじめ、センターに関する最新の情報を提供しています。ご活用ください。

農業技術センターNews No.137

令和6年1月1日発行

編集発行 広島県立総合技術研究所

農業技術センター技術支援部

〒739-0151 広島県東広島市八本松町原 6869

TEL: 082-429-0522(技術支援部)

E-mail: ngcgijutsu@pref.hiroshima.lg.jp